

ドイツのスポーツ教育における学校と地域社会の連携：その基本構造と特色を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤井, 雅人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4683

氏 名 藤 井 雅 人

本 籍 富 山 県

学 位 の 種 類 博 士 (学 術)

学 位 記 番 号 社 博 甲 第 27 号

学 位 授 与 の 日 付 平 成 12 年 3 月 22 日

学 位 授 与 の 要 件 課 程 博 士 (学 位 規 則 第 4 条 第 1 項)

学 位 授 与 の 題 目 ド イ ツ の ス ポ ー ツ 教 育 に お け る 学 校 と 地 域 社 会 の 連 携

— その基本構造と特色を中心に —

(Cooperation between School and Community in Sport Education in

Germany — Focusing on its Fundamental Structure and Characteristics —)

論 文 審 査 委 員 委 員 長 大 久 保 英 哲

委 員 藤 沢 法 暎, 佐 々 木 雅 幸

学 位 論 文 要 旨

本研究は、学校と地域社会の連携と位置づけられるドイツの学校スポーツとフェラインスポーツの連携を、その模索の背景、構造と特色という観点から明らかにし、両スポーツのさらなる連携促進のための課題を検討した。それを踏まえて、その連携モデルの具体的な提示をスポーツ種目「サッカー」を例にとって試みた。

先ず第1章では、学校スポーツとフェラインスポーツの連携を論じる際の前提として、それぞれのスポーツの構造、目標、課題を概観した。その結果、次のことを明らかにすることができた。

学校スポーツは、学校教育の枠組みの中で必修スポーツ授業と授業外学校スポーツという2つの形態を取って展開されていること、その目標と課題は、健康の維持・向上、身体体験や達成体験の獲得、社会的コンタクトの保証などといったスポーツの教育学的意義に基づいて多様に設定されていること、そして特にそうした教育学的に有意義なスポーツを、学校の中だけにとどまらず、授業終了後や学校卒業後の学校外のスポーツを視野に入れて展開していこうとする点に、学校スポーツの特色が見出された。また、フェラインスポーツはドイツ国民のスポーツ活動の基盤であるばかりでなく、その社会生活の円滑な営みにとって不可欠な機能を果たしている。しかしその一方で、現代社会の変化に伴って住民やフェラインメンバーのスポーツ関心・欲求が多様化してきており、フェラインスポーツの構造、目標、課題もまた多様化の傾向を見せている。このことによって伝統的なフェラインスポーツの在り方に現在大きな変化が生じてきていることが明らかになった。

学校スポーツが学校教育の枠組みの中でどのような教育学的効果を青少年に保証しようとしているのかを示した第1章を受けて、第2章では、フェラインスポーツが地域の青少年教育活動、すなわち「青少年活動」としてどのような教育学的意義を有するのかを考察した。その結果、次のことが明らかになった。

ドイツの青少年活動は、青少年教育における「第3の社会化機関」として極めて重要な機能を果たしている一方で、青少年を取り巻く現代社会の変化に伴って危機的状況に陥っている。例えばそれは、宗教組織、政党、労働組合などの青少年連盟による「連盟青少年活動」や、自治体の青少年局を中心に青少年センター、青少年の家などで展開される「開放的青少年活動」の不振に端的に表れている。そうした状況の中で、ドイツ最大の青少年連盟「ドイツシュポルトユエゲント (DSJ)」により統括

されるフェラインスポーツは、例外的に活況を呈した連盟青少年活動の1つとみなされる。ただし、フェラインスポーツが連盟青少年活動の一形態であるとはいえ、DSJという統括青少年連盟のレベルで設定される教育学的コンセプトのみでフェラインスポーツの教育学的意義を理解することは現実的でない。なぜならDSJは伝統的にスポーツ以外の領域の青少年連盟の承認を得る努力を展開してきたため、そのコンセプトの中で人格形成の促進のためのスポーツの教育的機能を強調する傾向が認められ、こうしたDSJの伝統が、統括青少年連盟によるコンセプトとフェラインスポーツの基盤として機能するシュポルトフェラインにおける実践との大きな乖離を生み出しているからである。つまり、フェラインでは、主に特定スポーツ種目の技能向上を目指したスポーツ活動が展開されているため、スポーツの教育的機能が強調されるDSJのコンセプトが活発に実践されることはないのである。こうした両者の乖離を埋める一歩として、「青少年」「スポーツ」「フェライン」という観点から構造的変化に直面するフェラインスポーツの新たな方向性を模索する試みを検討する必要がある。そこでは、フェラインスポーツの教育学的意義への視点に基づいて、競技スポーツ活動重視の伝統的方向性、余暇・大衆スポーツ重視の革新的方向性、両者の折衷的方向性という3つの方向性が提示されている。特に伝統的方向性ではアイデンティティの形成への貢献が、余暇・大衆スポーツ的方向性では社会的逸脱行動を伴う青少年へのソーシャルワーク的効果が、両者の折衷的方向性ではアイデンティティ形成と社会的統合をもたらす結合機関としてのフェラインの教育学的意義が期待される。

このようにフェラインスポーツには、DSJによる教育学的コンセプトとフェラインスポーツの実践に関し提示されている3つの方向性に関する総合的考察から、青少年活動における独自の高い教育学的意義が確認された。

第3章では、第1章と第2章で得られた知見を踏まえて、1980年代以降学校スポーツとフェラインスポーツの緊密な連携が模索されている背景を明らかにした。その際、理念的背景と実際的背景という2つの分析軸に基づいて考察を行った。そこでは以下のことが明らかになった。

学校スポーツとフェラインスポーツの連携は、連邦レベルでのそれぞれの統括組織である諸州文部大臣常設会議(KMK)とドイツスポーツ連盟(DSB)により作成された「学校体育促進勧告(1956年)」「第1次学校スポーツ行動計画(1972年)」「第2次学校スポーツ行動計画(1985年)」などの共同文書によって、その促進が理念的に保証されてきた。特に第2次学校スポーツ行動計画では、学校スポーツとフェラインスポーツの独自性を認めつつ、スポーツ教育における両者の共同責任を強調し、緊密な連携を当然のこととみなしており、過去の2つの共同文書と比較して連携が理念的に強く根拠づけられたといえる。またこの行動計画では、それまで競技スポーツ領域に偏ってきた傾向にある学校スポーツとフェラインスポーツの連携の行動領域を余暇・大衆スポーツ領域、統合スポーツ領域、障害者スポーツ領域など関連させて多様に設定しており、連携理念の拡大を印象づけている。第2次学校スポーツ行動計画に看取されるこのような連携理念の強化と拡大は、1980年代以降の連携理念の成熟を端的に反映しているといえ、そうした理念の成熟に呼応するように学校スポーツとフェラインスポーツの連携が強く求められるようになったと見ることができる。

このように、学校スポーツとフェラインスポーツによる連携の模索の背景を1980年代以降の連携理念の成熟の中に見出すことができる一方で、社会の変化に伴う青少年教育・青少年スポーツ・青少年文化の変化が、学校スポーツとフェラインスポーツの連携を不可欠にしているという見方もできる。そして、そうした連携の模索の実際的背景は、学校スポーツとフェラインスポーツそれぞれに関わるスポーツ的背景として捉えることができる。学校スポーツは、しばしば「悲惨な」と形容されるほど、必修スポーツ授業の実施時間やそれを教える学校スポーツ教師などに関して多くの問題を抱えており、フェラインスポーツの支援が必要であると認識されている。また、伝統的な学校スポーツ種目に偏って展開される必修スポーツ授業の教科内容と児童・生徒のスポーツ関心・欲求が合致しなくなっている状況も指摘されており、ここでもやはりフェラインスポーツとの連携によって両者の乖離を埋めるよう要求されている。このように学校スポーツとフェラインスポーツとの連携は学校スポーツの問題

状況を背景に新しい在り方を模索する試みとして捉えることができる。また一方で、構造的変化に直面するフェラインスポーツの問題状況が学校スポーツとの連携を不可欠としていることも事実である。フェラインスポーツでは、1980年代以降顕在化する青少年スポーツの構造的変化に伴ってフェラインと青少年フェラインメンバーとの関係が脆弱化しており、青少年フェラインメンバーの退会・再入会行動が増大している。このような状況は、フェラインにおける「青少年メンバーの減少」と「スポーツタレントの不足」という問題を生み出しており、そうした問題を解決する1つの方策としてフェラインスポーツの側から学校との連携を模索する動きが活発化している。

このような学校スポーツ・フェラインスポーツの個別の問題状況という観点ばかりでなく、青少年の発達の危機という観点からも学校スポーツとフェラインスポーツの連携が強く求められている。例えば現代の青少年の深刻な身体的・精神的・社会的な健康阻害の問題、現代社会の個別化に伴う青少年の方向性の喪失やアイデンティティ形成の阻害の問題は、教育的観点から見た学校スポーツとフェラインスポーツとの連携の模索の実際的背景と捉えることができる。

第3章では、以上のように学校スポーツとフェラインスポーツの連携が求められる背景を理念的背景と実際的背景に分け、さらに実際的背景をスポーツ的背景と教育的背景に分けて明らかにした。第4章では、そのような理念的・実際的背景から模索されている学校スポーツとフェラインスポーツの連携を、連邦・州・現場レベルの連携から成る「スポーツ協働教育システム」として構造化し、それがどのような特色をもって展開されているのかを検討した。そこでは次のことが明らかになった。

連邦レベルでの学校スポーツとフェラインスポーツの連携は、KMK, DSB, スポーツ大臣会議, 各スポーツ種目連盟といった組織によって実践される。これらの組織によって実践される学校スポーツとフェラインスポーツの連携は、「第2次学校スポーツ行動計画」と「学校/学校官庁とシュポルトフェライン/スポーツ連盟との連携の強化についての文部大臣会議・スポーツ大臣会議・ドイツスポーツ連盟の見解」という共同文書の内容に端的に表れているように、州・現場レベルで展開される連携のための理念的枠組みを提示し、協働教育システム全体を理念的に方向づける機能を果たす。協働教育システムの最上位に位置づけられる連邦レベルでの連携理念は、学校スポーツとフェラインスポーツの連携が協働教育システムのより下位のレベルにおいて具体的に展開される際の指針となるよう求められる。

各州に教育・科学・文化政策に関する大きな権限が認められているドイツでは、州レベルで展開される学校スポーツとフェラインスポーツの連携が協働教育システムの中で果たす役割は大きい。とりわけ各州の文部省と州スポーツ連盟によって作成される連携プログラムは、連邦レベルで提示された連携理念を踏襲しつつも、それを独自の観点から再設定し、現場レベルでのその理念の実現のための具体的制度を規定していることから、協働教育システムを実際的に方向づけていると見ることができる。

連邦レベルで提示された連携理念を州レベルで独自に再設定し、その実現のための制度的枠組みを示している連携プログラムを具現化するのは、学校とフェラインという現場レベルでの連携である。従って、連邦・州レベルで展開される学校スポーツとフェラインスポーツの連携の具体的な成果は、連携プログラムを具現化するそうした現場レベルでの連携に表れてくることになる。しかしながら、連携プログラムによって「制度化された」学校スポーツとフェラインスポーツの連携は、現場レベルで展開される連携全体から見た場合、ある部分的な成果を示すに過ぎない。なぜなら制度化されていない「非公式の」連携もまた現場レベルの連携には存在するからである。例えばそれは、学校スポーツ教師やフェライン指導者の個人的なイニシアチブによる特定の学校と特定のフェラインとの連携という形で表れてくる。また、全般的教育学的・スポーツ教育学的力量と共にフェライン指導者特有の特定スポーツ種目指導の力量を兼備する学校スポーツ教師による必修スポーツ授業・授業外学校スポーツの実施、そうした学校スポーツ教師によるフェライントレーニングの実施なども、現場レベルで展開される学校スポーツとフェラインスポーツの連携として捉えることができる。

ここまで明らかにになった連携の現状と課題を踏まえて、第5章では、学校スポーツとフェラインスポーツの連携のさらなる促進のために、「どのような指導者が、どのような場で、どのような内容を指導するのか」に焦点を当てた、現場レベルでの連携を基軸とする協働教育システムのモデルの提示を試みた。具体的には、スポーツ種目「サッカー」を例に、ノルトライン・ヴェストファーレン州の学習指導要領やドイツサッカー連盟（DFB）の青少年サッカー教程といった文献資料と、本研究者自らが体験したケルンスポーツ大学のサッカー専門教育やDFBのB級コーチライセンス講習会での教育内容に基づいて、「学校とフェラインでの適切なサッカー教育の展開」とそれを可能とする「力量ある指導者の養成」が核になる協働教育システムのモデルを構想した。

以上のことから、ドイツのスポーツ教育における学校とフェラインの連携が、現代社会の変化に伴ってその教育学的機能を十分発揮できなくなっている既存の教育機関の新たな在り方を模索する試みの1つとして捉えられうること、またそうした模索の試みの中で、スポーツ的な関心と青少年の健全な発達を保証するという教育学的関心を基盤として、連邦・州・現場レベルで体系的に展開される学校スポーツとフェラインスポーツの連携が先駆的事例として高く評価されるべきであること、そして両スポーツのさらなる連携促進のために提示された、現場レベルの連携の実態に即した連携モデルが、「連携現場」と「指導者養成」という視点から他の教育領域にも応用されうることを明らかにした。

Abstract

School sport and club sport in Germany have played a pedagogically important role in schools and communities respectively. In Germany, at the same time, school sport and club sport started to cooperate increasingly intimately, especially after the 1980's. The purpose of this study is to consider the following questions : 1) What background did this intimate cooperation between school sport and club sport come from? 2) In what structure and with what characteristics is this cooperation developed?

Because of both ideal background and practical background, the cooperation between school sport and club sport became necessary. Responding to the prevalence of "the idea on cooperation" in the 1980's, the cooperation has become more and more active. The cooperation is required, on the other hand, as a strategy to deal with following problems, for instance, critical situations in school sport, the crisis of club sport in process or structural change, and the crisis in the development of young people.

The cooperation between school sport and club sport is developed in "the cooperative sport education system" where there is the cooperation between the federal level, the state level, the level of schools and sport clubs. The federal level practiced by the Education Minister Conference and the German Sports Federation etc., present "the idea on cooperation" which indicates the direction of the entire system. The state level practiced by Ministries of Education and State Sports Federations etc., provide for concrete measures how to achieve the federal level of "the idea on cooperation", especially in the frame of the cooperation programs. The cooperation programs are put into practice by the cooperation between each school and each club in states. At this level, non-institutionalized and informal cooperation is also being developed together with the cooperation institutionalized by the cooperation programs. To seek this cooperation, the role of school sport teachers and sport club coaches who are pedagogically capable, sport-pedagogically able, and have a coaching ability on specific sports items is extremely important.

学位論文審査結果の要旨

本研究は、これまでわが国はもちろんドイツにおいても十分明らかにされてこなかった、学校スポーツとフェラインスポーツの連携が、どのような理念、構造、特色を持ち、どのような社会的背景の中で出現しているのかを分析し、さらにそれらを踏まえて、両者のさらなる連携のための実践的な指導者養成モデルを「サッカー」を例に具体的に提示することを試みた研究である。

先ず第1章では、学校スポーツとフェラインスポーツのそれぞれの構造、目標、課題を概観し、次のことを明らかにしている。つまり学校スポーツは、健康の維持・増進、身体経験や達成経験の獲得、社会性の保障などといった教育の固有の枠組みの中で構想され、実態としては正課の授業と授業外学校スポーツという2つの形態を取って展開されているが、さらに授業終了後や学校卒業後など学校外のスポーツを視野に入れた改革が求められており、また他方これまでドイツ国民のスポーツ活動の基盤とされてきたフェラインスポーツも会員数の減少など大きな壁に直面しているという。

第2章では、フェラインスポーツが地域の青少年教育活動にどのような教育学的意義を期待されているのかを分析している。ドイツの青少年活動は、家庭、学校に続く「第3の社会化機関」として極めて重要な機能を果たすことが期待されているにもかかわらず、青少年を取り巻く社会環境の変化に伴って、既存の宗教組織、政党、労働組合などの「連盟青少年活動」が不振に陥っている状況の中で、フェラインスポーツのみは例外的に活況を呈していることが明らかにされ、本来このような教育機能を主目的としないフェラインスポーツに対して、新たな教育学的貢献への期待が生じていることを明らかにした。具体的には、伝統的に競技スポーツ活動を重視するフェラインスポーツに対してはアイデンティティ形成機能が、余暇・大衆スポーツを重視するフェラインスポーツには、社会的逸脱行動を伴う青少年へのソーシャルワーク的機能が、両者の折衷的方向を目指すフェラインスポーツに対してはアイデンティティ形成と社会的統合といった教育学的機能の貢献が強く期待されているという。こうしたフェラインスポーツへの教育学的機能については、これまで全く解明されてきておらず、本論文の注目すべき見解のひとつである。

こうした学校スポーツとフェラインスポーツの状況を受けて、第3章では、1980年代以降活発になった両者の緊密な連携模索の背景を分析している。それには理念的背景と現実的な背景という2つのモメントが存在するという。

つまり、理念的背景としては、諸州文部大臣常設会議（KMK）・ドイツスポーツ連盟（DSB）により作成された「学校体育促進勧告（1956年）」「第1次学校スポーツ行動計画（1972年）」「第2次学校スポーツ行動計画（1985年）」などの共同文書によって、比較的早い時期から学校スポーツとフェラインスポーツの連携を促進するよう求められてきたことがあるという。特に1985年の「第2次学校スポーツ行動計画」は、学校スポーツとフェラインスポーツの独自性を認めつつ、スポーツ教育における両者の共同責任を強調し、緊密な連携を当然のこととみなして、それまで競技スポーツ領域に偏ってきた連携領域を余暇・大衆スポーツ領域、外国人や社会的弱者を視野に入れた統合スポーツ領域、障害者スポーツ領域などと複合させて多様に設定し、連携理念を拡大するよう要請しているという。

現実的な背景としては、第1に、しばしば「悲惨な」と形容されるドイツの学校スポーツ事情があげられる。例えば、必修スポーツ授業の実施時間不足や教師不足、教科内容と児童・生徒のスポーツ関心・欲求との乖離などに多くの問題を抱えており、フェラインスポーツの支援や連携が必要であると認識されているという。

第2に、フェラインスポーツの側も、学校スポーツとの連携を必要としているという。たとえばフェラインスポーツは、1980年代以降青少年フェラインメンバーの退会・再入会行動が増大し、フェラインにおける「青少年メンバーの減少」と「スポーツタレントの不足」という問題を生み出しており、そうした問題を解決する1つの方策としてフェラインスポーツの側から学校との連携を模索する動きが活発化していると述べる。

さらに、第3に、青少年の深刻な身体的・精神的・社会的な健康阻害の問題、現代社会の個別化に伴う青少年の方向性の喪失やアイデンティティ形成が阻害されている問題など、青少年の発達に危機感を募らせている教育関係者の立場からも両者の連携が強く支持されているという。

第4章では、そのような理想的・实际的背景をもとに模索されている、学校スポーツとフェラインスポーツの連携を、連邦・州・現場レベルの連携から成る「スポーツ協働教育システム」として構造化し、それらがどのような特色を持って展開されているのかを検討している。そこでは次のことが明らかにされている。

連邦レベルでの学校スポーツとフェラインスポーツの連携は、KMK、DSB、スポーツ大臣会議、さまざまなスポーツ種目連盟といった組織によって実践されるが、これらの中で最上位に位置づけられる連邦レベルでの連携理念が、より下位のレベルにおいて具体的に展開される際の指針の機能を果たしているという。

各州に教育・科学・文化政策に関する大きな権限が認められているドイツでは、州レベルの連携理念が協働教育システムの指針として果たす役割は大きいけれども、さらにその実現のための連携プログラムを具体化するのには、学校とフェラインという現場レベルでの連携である。従って、連邦・州レベルで展開される学校スポーツとフェラインスポーツの連携の具体的な成果は、現場レベルでの連携プログラムに基づいた分析が必要になる。

しかしながら、現場レベルの学校スポーツとフェラインスポーツの連携には「制度化された」公式なプログラムのほかに、「制度化されない」非公式の連携も存在し、連携全体から見た場合、「制度化された」公式なプログラムはむしろ少数であるという。例えば、実際には学校スポーツ教師やフェライン指導者の個人的なイニシアチブによる特定の学校と特定のフェラインとの連携などが多様に行われており、モデルとされるような連携は実態としては構築されていないのだという。こうした連携プログラムの実態把握は2年に及ぶ留学中の実体験を踏まえなければ不可能なものであり、本研究の高く評価できる部分である。

以上のような連携の理念や現状を踏まえて、第5章では、学校スポーツとフェラインスポーツの現場レベルでの連携をいっそう促進するための仮説的な協働教育システムのモデルの提示を、ドイツで最も人気があり、また自らもフェラインで選手経験を持つスポーツ「サッカー」を例に試みている。現場レベルでは「学校とフェラインが連携した適切なサッカー教育の展開」を可能にするのは「力量ある指導者」であり、したがって「どのような力量を備えた指導者が、どのような場で、どのような内容を指導するのか」という観点から、指導者養成論を主としたモデルを提示している。このモデルは本人の長い選手経験やケルン体育大学留学、サッカーフェラインでの選手体験や講習会参加を踏まえて取得した、わが国ではまだ20人前後に過ぎないドイツB級サッカーコーチ資格を持つ本人の専門的な理論的・実践的経験と知見に基づく独自のもので、高く評価できるものである。

本論文はこのように、1980年代以降活発に展開されてきている学校スポーツとフェラインスポーツの連携が、ドイツ社会の変化に伴って、家庭、学校、地域が社会化を中心とした教育機能を著しく低下させるなかで、新たなあり方を目指して連携する姿であると捉える。

こうした新たな青少年教育のあり方を模索する試みは、ドイツはもとより、わが国もふくめた先進諸国に共通の課題であることは周知の事実である。本研究の成果は、青少年の個と共同体をいかに構築するか、という観点からきわめて大きな示唆を与えるものである。また結論に指摘されているように、こうした試みがスポーツを媒介になされていることの意味を考える必要がある。すなわち、スポーツに特有の身体体験、アイデンティティ形成、コミュニケーション能力の促進などは、スポーツに優れて特徴的な機能であり、そのことへの着目と期待が背景となって、スポーツ教育における学校と地域社会の連携が活発に展開されてきていると見るべきだろう。

本研究では、学校と地域社会の連携をスポーツ以外の教育領域と比較考察していないため、スポーツ教育における学校と地域社会の連携の独自性や問題点が必ずしも十分に描き出されていない点、ド

イツとはいいながら旧東ドイツ地域の検討がなされていない点、また競技スポーツの過熱化や商業主義など、現代スポーツの持つ裏面性に対する考察の照射が必ずしも深められていない点などに限界も見られる。が、ドイツ現代社会における青少年の発達や教育に関する深い洞察を基に、青少年活動におけるスポーツの教育的意義の確認、これまで十分理論化されてこなかった学校スポーツとフェラインスポーツの連携の背景を明らかにし、そうした連携の構造と特色を示していること、自らの理論的・実践的な知識・技能を土台に独自の実践的連携モデルを提示したこと、等に優れた研究成果を見ることができる。

以上の理由により、審査委員は全員一致を以て本論文を博士（学術）論文として合格であると判定したことを報告する。